

奴隷のためのデイルハム

九・一〇世紀のイスラーム世界と北ヨーロッパ間の奴隷交易

マレク・ヤンコヴィアク

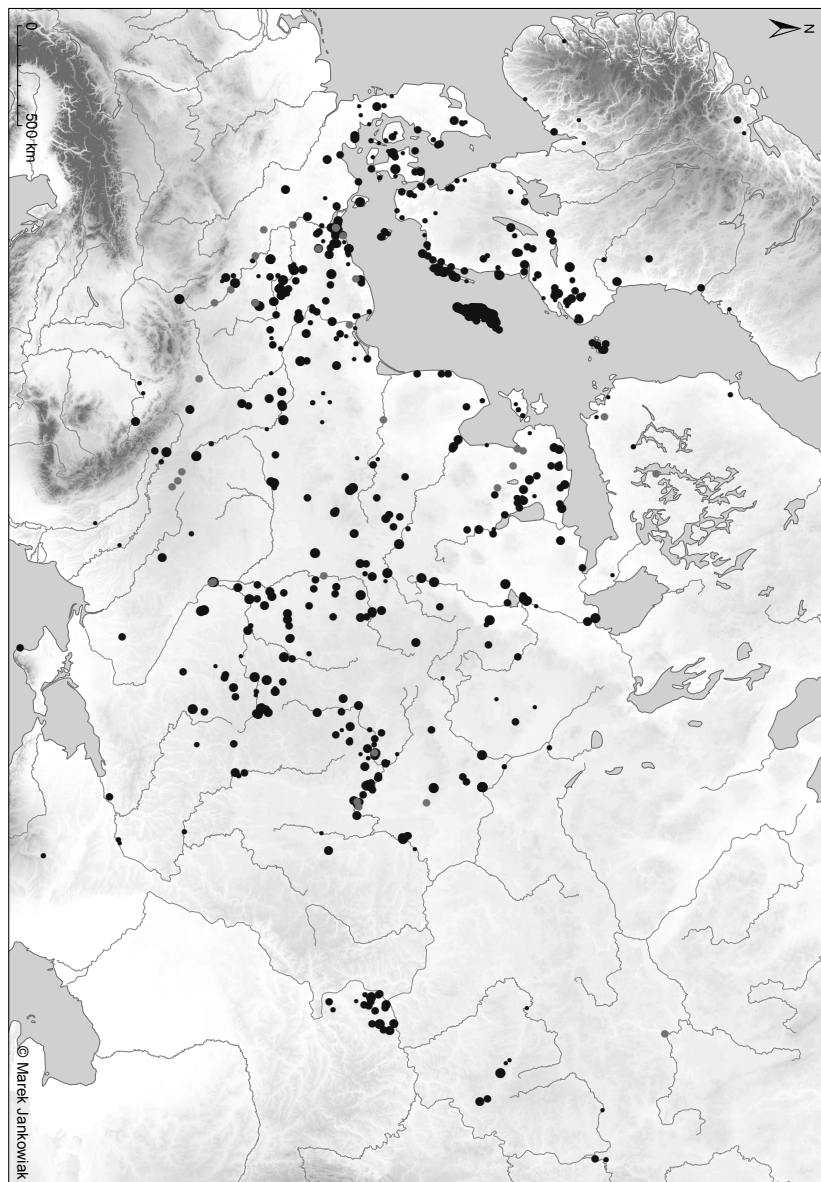
小澤 実 訳

はじめに

九・一〇世紀の北ヨーロッパとイスラーム世界を繋げていたのは、ある巨大な交易システムでした。^①その存在を証言するのはとりわけ、ブリテン諸島からウラル山脈の間に位置する北・東ヨーロッパに沿って散在する何十万枚というデイルハム（イスラーム銀貨）です（**地図1**）。貨幣の数量、それらの移動距離——直線距離で四〇〇〇キロメートル（ロシアの曲がりくねった河川沿いであればもっと）——、八〇〇年から一〇〇〇年という二〇〇年にわたって

持続的に流入したこの銀貨そのものにより、それは、モンゴル以前のユーラシア西部ではほぼ比肩するもののない規模を持つ交易システムであったことが示されます。

そうだとすれば、以上の事実が近代の歴史家たちの注意を惹くことがほとんどなく、教科書も専門研究もほぼ存在しないのは驚くべきことです。その理由の一端は証拠の性質に起因します。イスラーム世界と北ヨーロッパ間の交易は、アラビア語、ヘブライ語、教会スラヴ語、古北欧語、ギリシア語、ラテン語の記述テキストにもある程度の痕跡を残していますが、主たる証拠は北ヨーロッパで発見さ



地図1：北ヨーロッパのディルハム埋蔵宝

奴隷のためのデイルハム（ヤンコヴィアク）

れるデイルハムによる埋蔵宝（hoard）なのです。それらは莫大な分量であるために——現在知られているだけで、四〇万の貨幣を含む一七〇〇の埋蔵宝——、しばしば煩雑となる量的分析が必要となります。しかしながら、そのようなアプローチを困難としているのは、最も多数の埋蔵宝を持つ国（スウェーデン、ロシア、ウクライナ）に限って刊行された情報が少ないからです。そのため、こうした古銭資料の包括的研究がこれまで刊行されていなかったとしても不思議ではありません^③。

しかし二〇世紀の歴史家たちが、私がこれから論じようとする奴隷交易システムとはなんであるのかに関わろうとしなかった主な理由は、イデオロギーであるように思われるのです。ヨーロッパの中世研究は、封建制、マルクス主義、ナシヨナリズムといったヒストリオグラフィー上の枠組みによってかなりの程度作り上げられてきました。それらのうち封建制とマルクス主義は奴隷制を中世ヨーロッパ社会と相いれないものとみなし、ナシヨナリズムは近代国家の起源に関して影を落としたかもしれない、そうした国家群の現在の境界線に疑義を投げかけたりしかねないナラティブ群と対立をしていました。このような観点から、奴隷交易はナシヨナルな過去に対する汚点であり、包み隠された状態にあるのが最良であつたのです。マイケル・マ

コーミックによる二〇〇一年の著作『ヨーロッパ経済の起源』、そしてその一年後に刊行された彼の重要論考「暗黒時代」への新しい光…いかにして奴隷交易がカロリング経済に活力を注入したか」によってようやく、奴隷交易に関する研究が再生を果たしました^④。大規模奴隷交易が初期中世の「ヨーロッパ経済」の再浮上に決定的な貢献をしたとするマコーミックの見方は広く受け入れられてきました。しかし彼の研究が地理的な限定を課していた結果、彼が対象としたカロリング帝国のさらに先にある北方や東方を無視することになりました^⑤。しかしながら、まさにこの領域こそがほとんどの初期中世の奴隷そして奴隷商人の出身地であつたことをこれから確認することになるでしょう。

この論考では、九・一〇世紀における、従来等閑視されていた地域とイスラーム世界の間の奴隷交易を概観することになります。第一節では奴隷交易の地理とクロノロジーを再現し、第二節では奴隷交易を推し進めた原動力、つまり北ヨーロッパとイスラーム世界における奴隷と銀の需要と供給について考察し、最終節では両者の交換が生み出した長期的な影響、とりわけ最初の千年紀の最後における北ヨーロッパ諸国家の生成について論じることになるでしょう。

一 等閑視されてきた奴隸交易システム

古銭と文献の証拠を結びつける作業は必ずしも一筋縄ではいきません。しかしながら、デイルハムの北ヨーロッパへの流入という事例に際して、この二つのタイプの資料は同じ歴史像を語るのです。中世研究にとって普通なことではありますが、むしろ困難が認められるのは、あまりにも多すぎる資料からクロノロジーにそったナラティブを抽出することなのです。

デイルハム埋蔵宝

北ヨーロッパで発見された約一七〇〇に上る、現在知られる埋蔵宝のうち、およそ半分はデイルハムのみ、もしくはほとんどがデイルハムで構成されています。残りの埋蔵宝では、西ヨーロッパ起源の貨幣（通例ドイツかアングロサクソン）がかなりの程度を占め、デイルハムは多くありません。一般的にはデイルハム埋蔵宝よりも後の時代に属するこうしたタイプの埋蔵宝は、イスラーム世界と北ヨーロッパ間の交易について伝えてくれることはさほど多くありません。それゆえ本稿では、デイルハム埋蔵宝、それとも少なくとも五〇パーセント以上はデイルハムが含まれる埋蔵宝に焦点を当てることにします。私が収集できたのは、

八三三の事例から得られる情報です。そのうち七〇九件について、十分なクロノロジーデータを手に入れることができます。^⑥

これらの埋蔵宝は、初期中世ユーラシア西部に関する計量可能なデータとしては、最大限のまとまりを構成していると考えて良いでしょう。それは、たとえ絶対数においてより多くのアングロサクソンやドイツの貨幣が一一世紀にバルト地域へ輸入されたと考えられるとしても、です。^⑦しかしデイルハムは、西欧の貨幣とは異なり、常にそれらが打造された正確な場所と年号が刻銘されているという点で、西欧起源の貨幣よりも多くの情報をもたらしてくれます（図1）。その結果として、デイルハムの北ヨーロッパへの流入のクロノロジーを詳細に再建することが可能となるのみならず、様々な計量アプローチもまた可能となるのです。^⑧



図 1

ヒジュラ暦 292 年（西暦 904-5 年）にサマルカンドで打刻された、サーマーン朝
アミール、イスマーイール・イブン・アフマドのデイルハム。表面（左側）中央部
の刻銘「唯一神のほかには神はなし。神に並び立つものなし」内側文字列「神の名
において、このデイルハムは 292 年サマルカンドで打刻された」外側文字列
「後にも先にも命令が属するのはアッラー。その日に信じる者は、アッラーの勝利
で喜びを得るだろう」（クルアーン 30：4-5）；裏面（右側）中央部の刻銘「アッ
ラーのために。ムハンマドは神の使徒。（カリフ）アルムクタフィー・ビッラー。
アミール・アルムウミニーン（or 信徒の長）」外縁文字列「ムハンマドは神の使徒。
神はかの者を守護し、そして真実の信仰とともに、それをすべての信仰に知ろし
めすために遣わした。多神教徒はそれを憎むけれども」（クルアーン 9：33）

アラビア語史料

これまで北ヨーロッパで発見されたおおよそ四〇万枚のディルハムも、もちろん本来流通していた全体の一部に過ぎません^③。それは、数千万枚とまでは言わなくとも、数百万枚には達していたに違いありません。それではなぜ、それほどまでに大量の銀貨が、イラン、イラク、中央アジアの打造所から数千キロメートルも離れた北ヨーロッパへと輸入されたのでしょうか。

九・一〇世紀にアラビア語で執筆された地理書の著述家が一つの回答を与えてくれます。彼らの記述に従えば、銀を求めるスカンディナヴィア出身の戦士^④商人が銀を好み、奴隷交易へ手を染めていたことを認めることができるでしょう。九〇〇年ごろに執筆したイブン・ルスタは次のように記述します。

「ルーシは船で遡行しサカールバのもとに到達するや彼らを略奪し、捕虜として捕まえ、ハザルやブルガールで売却した。彼らは耕作可能な土地を持つておらず、サカールバの土地を略奪して生計を立てていた。∴彼らはクロテン、ハイイロリス、その他の毛皮を取引することで生活を送っていた。彼らはそれらを銀貨と交換し、その銀貨をベルトに提げ腹回りに巻いていた。∴彼らはその奴隷を丁寧扱

い、相応しく着飾らせていた。というのもそれらは交易のための商品だったからである。」^⑤

アラビア語地理学書で用いられる民族名が何を指すのかについては多くの議論が積み重ねられてきましたが、「ルーシ」がスカンディナヴィア人に、「サカールバ」がスラヴ人に対応することについてはほとんど疑問の余地はありません^⑥。イブン・ルスタによれば、スカンディナヴィア人は、ハザルやブルガールの市場で、毛皮とスラヴ人捕虜を売却することで生活の糧を得ていました。こうした説明は、九二二年にヴォルガ沿岸のブルガール人の市場を訪問したアッバース朝の使節アフマド・イブン・ファドラーンが、その著名な旅行記において、スカンディナヴィア系商人について試みている次の記述によっても確認されます。

「私はルーシを見た。彼らは交易のために到来し、イティル川（現在のヴォルガ川）沿いに進んだ∴彼らとともにいたのが、商人に売るための美しい奴隷の少女だった∴彼らの小舟が港に着くや否や、彼らのいづれもが上陸し∴巨大な偶像の前でひざまづき、こう言った。「わが神よ、私は遠く離れた国からやってきた。そして私はこれほどたくさんの若い少女の奴隷とクロテンの毛皮を手にしていた∴私

奴隷のためのデイルハム（ヤンコヴィアク）

があなたにお願いしたいのは、莫大な金貨と銀貨を持ち、私が欲するものをなんでも買うことが出来、私の値段について私と議論をしない商人を送ってくださいることです。」

イブン・フアドラーンの記述内容の信頼性についてはこれまで多くの議論がなされてきました。しかし、スカンディナヴィア人は値切ることを嫌っている点、あるヴァイキングの首領の船葬の記述が考古学的な知見と重なっている点など、数多くの細部にわたる記述にかんがみて、内容が正確であることは確認されています。この二つのアラビア語史料の説明を補足的なそのほかの史資料と合わせることにより、ムスリム商人に対する奴隷と毛皮と引き換えに、スカンディナヴィア人がデイルハムを北ヨーロッパにもたらしたことを疑う余地はほぼありません。

交易の地理とクロノロジー

デイルハム埋蔵宝により我々は文字史料から立ち現れる歴史像をより鮮明なものとするのが可能となります。地
図1に示されているように、デイルハム埋蔵宝は、ほとんどの場合、バルト海沿岸ならびにドイツ東部やポーランドからルーシに広がる空間全域で発見されています。埋蔵宝が最も集中する地域は、バルト海のおおよそ中央に浮かぶ

ゴットランド島です。そこでは現在知られている埋蔵宝のほぼ四分の一が発見されています。スウェーデン本土（とりわけウップランド）、ポーランド（とりわけヴィエルコポルスカとポモージェ）、エストニア、ロシア（とりわけクルスク地方、オカ川沿岸、ヴォルガ・ブルガール一帯に顕著に集中）、ウクライナ、ベラルーシに埋蔵宝の相当数が集中しています。銘記すべきは、スカンディナヴィア人の居住地（とりわけスウェーデンやロシア）のみならず、ポーランドやエストニアといったスラヴ人やフィン人の居住域でも発見されていることです。ここから示唆されるのは、スカンディナヴィア人に加えて、そのほかの民族集団も北ヨーロッパとイスラーム世界との交易に関わっていたことです。これから見ていくように、近年の考古学の証拠もこの結論を確認します。

クロノロジーの観点に立てば、デイルハムの流れには二つの大きな波があります。一つは八〇〇年から八七五年にかけての波です。この時期はアッバース朝カリフの名前でイランとイラクにおいて生産されていたデイルハムが支配的でした。もう一つの波は九〇〇年から九八〇年です。最初の波に比べると流通量は三、四倍に増加し、中央アジアで打造されたサーマーン朝君主の貨幣でほとんどが構成されるようになりました。このようなクロノロジーは埋蔵貨

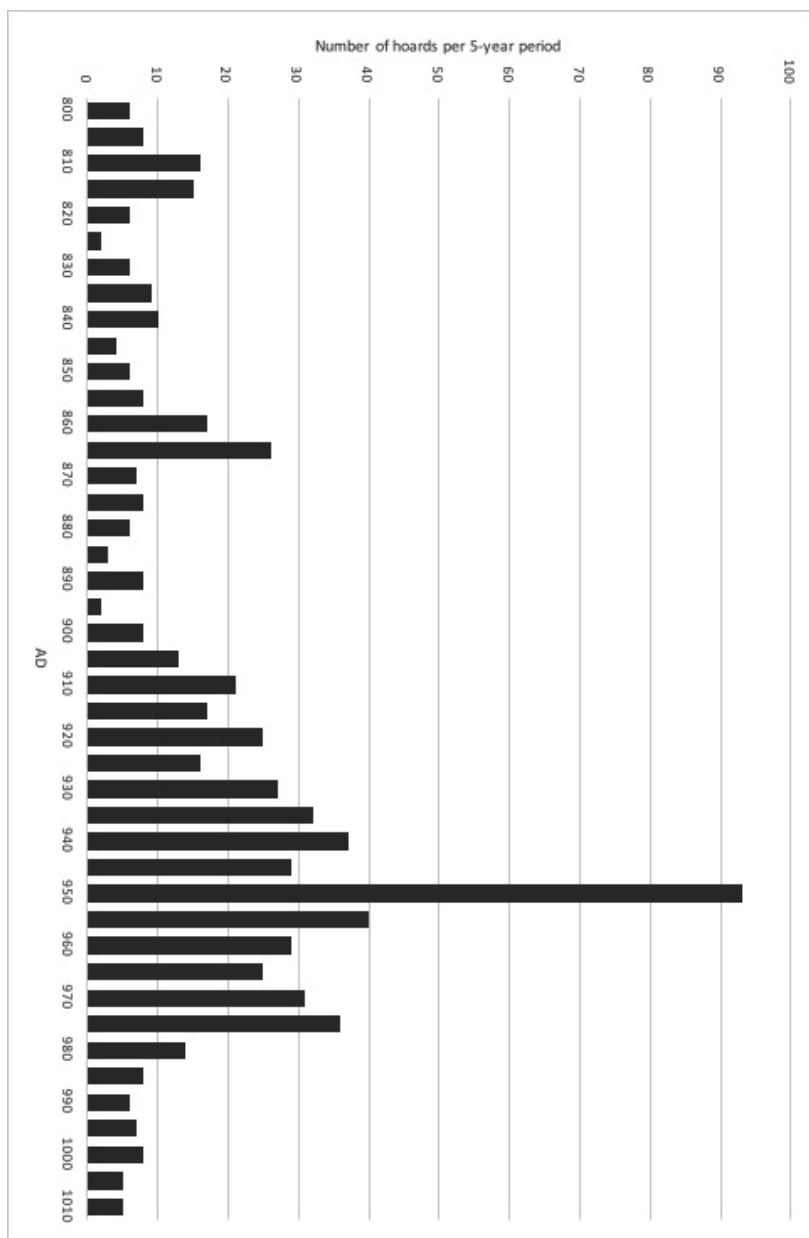


図2 北ヨーロッパのディルハム埋蔵宝のクロノロジー。年代は当該埋蔵宝の最も新しい貨幣に基づく。

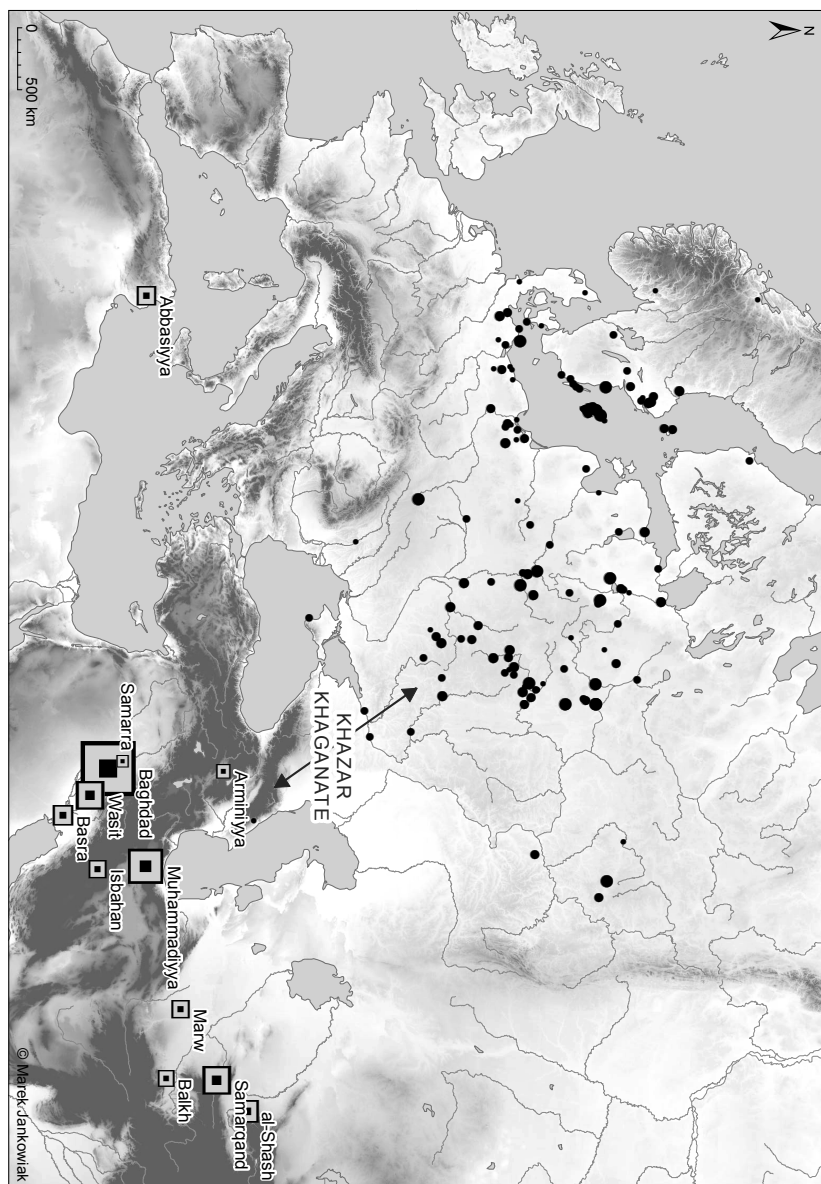
奴隷のためのデイルハム（ヤンコヴィアク）

の *terminus post quem* (tpq)、つまり埋蔵宝のなかで最も新しい貨幣の打造年から判断できます（**図2**）。tpqが与えるのは、ある埋蔵宝が埋蔵された、考えられる限り最も早い日付の指標ですが、その解釈は一筋縄ではいきません。とりわけ、そこに含まれる貨幣がどのようにして蓄積されたのかについてはほとんど伝えてくれないのです。実際、数世代にわたって蓄積された埋蔵宝もあれば（ほとんどはゴットランド島のもの）、東欧奴隷市場のどこかで一回の支払いを反映したに過ぎないものもあります。**図2**で確認できる、八六〇年代から七〇年代にかけてと九五〇年代という二つの山は、必ずしもデイルハムの北ヨーロッパへの流入が増加した時期と対応するものではありません。その二つの山はむしろその流れが断絶したこと、つまり、新しい貨幣が埋蔵宝に追加されなくなった時期を指しています。そうであるならば、デイルハムの流れのクロノロジーを再現するためには、様々な時点における埋蔵宝のトポグラフィと構造を調査する必要があります。私は、その点については他の論文で試みましたが、以下においてその内容を要約しましょう。¹⁶⁾

スカンディナヴィア人とイスラーム世界との交易による接触は八〇〇年ごろに確立されました。まさにルーシの地

に初期のデイルハム埋蔵宝が埋蔵された時期です。こうした接触を仲介したのはハザル人でした。彼らは黒海とカスピ海との間の草原を中核とする遊牧帝国をつくりあげ、九世紀を通じてユーラシア草原の西部において主要な役割を果たしていました（**地図2**）。スカンディナヴィア人は当初、毛皮を取り扱っていたことは間違い無いでしょうが、奴隷交易の方がはるかに利益をもたらすことを実感するのには時間が必要ではありませんでした。アラビア語史料が初めてサカリバ（スラヴ人）の奴隷について触れ始めるのは八〇〇年頃であり、九世紀に入って言及が稀ではなくなってきたのは偶然ではありません。¹⁷⁾

デイルハムの流入はさしたる中断もなく八六〇年代まで継続しました。その時流通量は突然増大しましたが、しかしそれに続く七〇年代の半ば、すなわち八七五年頃には停止しました。それは交易システムを結ぶ二つの極における問題によって引き起こされたと考えられます。すなわちアッバース朝カリフ制の政治上かつ財政上の危機とルーシ北部における政情不安です。後者についてはいくつかの重要な考古学発掘地における破壊の痕跡により裏付け可能です。¹⁸⁾しかしスカンディナヴィアとイスラーム世界との交易は完全に停止したわけではありませんでした。デイルハム



地図 2：9世紀のディルハム埋蔵宝、貨幣製造所、主要交易路

奴隷のためのデイルハム（ヤンコヴィアク）

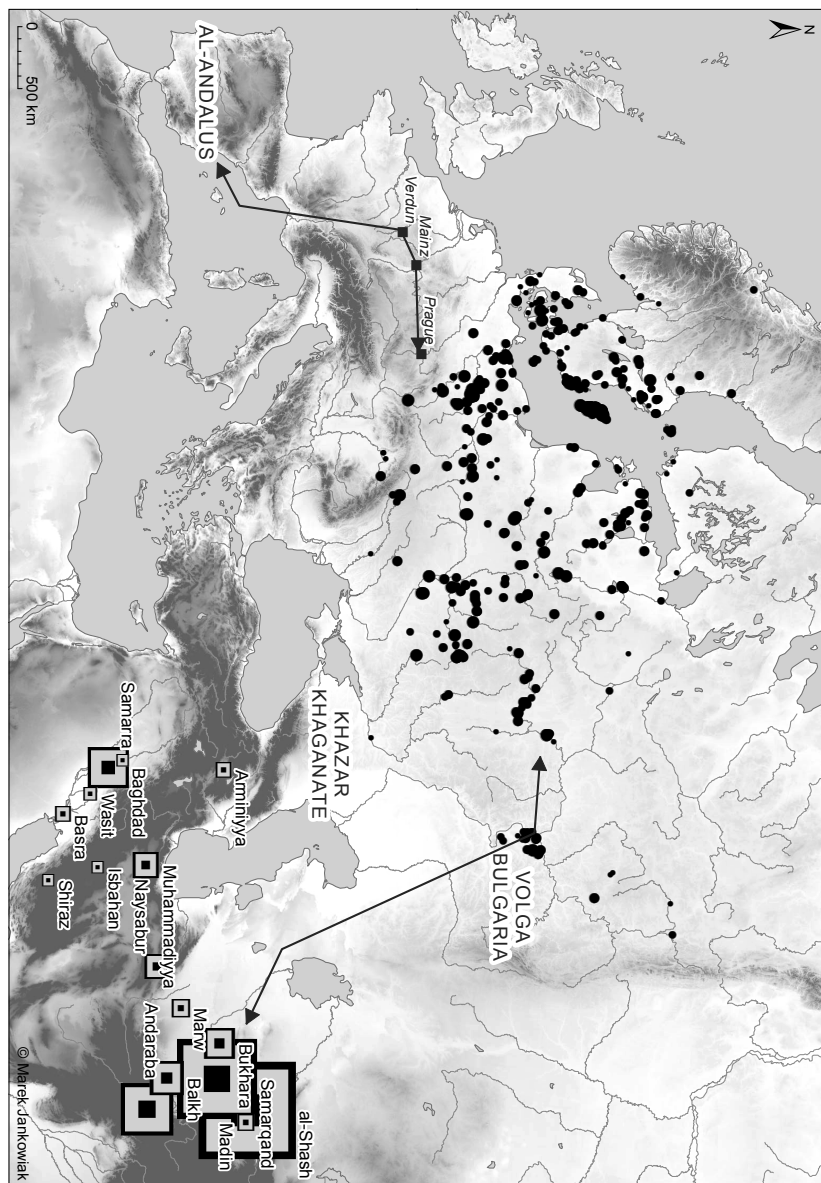
は、今やウクライナとポーランド東部を通過するルーシを迂回するルートを利用することで、九世紀の第四・四半世紀にゴットランドとスウェーデンに流れ続けていたのです。

全てが変化するのは八九二／三年直後です。その時、中央アジアを支配したサーマーン朝の君主イスマーイール・イブン・アフマドは、莫大な量の高品質のデイルハムの打造を開始しました。数年の間は、新たに入手可能となった銀がムスリムとスカンディナヴィア人の間の交易を再生させました。当初、ハザル人が交易を仲介していましたが、カスピ沿岸を略奪したルーシの船団がムスリムであるハザル人傭兵によって虐殺された九一〇年頃、両者の関係は断絶しました。^{①⑨} その結果、メインの交易路は東北部へと移行し、スカンディナヴィアとムスリムの商人が主として接触する場として、ヴォルガ・ブルガールが立ち現れました（**図3**）。

こうした新しい地理的配置図において、スカンディナヴィア人とムスリムとの交易は、九二〇年から五〇年までの間にその最高潮に達しました。この北方の戦士たちは、以前と同様に膨大な奴隷と毛皮と引き換えに莫大な量のデイルハムを入手することに成功しました。しかしこの交

換システムの表面上の安定にもかかわらず、交易ルート、銀が埋蔵される空間、奴隷が獲得される地域は絶え間なく浮動していました。結局、スカンディナヴィア人の、飽くなき銀への渴望は、ムスリム商人の財務諸力を遥かに凌駕していたのです。サーマーン朝の銀は、その他のイスラーム王朝、とりわけイラン北部のブワイフ朝のデイルハムと、おそらくヴォルガ・ブルガールで打造された模倣デイルハムからの補填はあつたものの、入手可能なイスラーム貨幣の質の低下と量の減少を止めることはできませんでした。こうした質量両面におけるデイルハムの低減は、アフガニスタン北部のパンジュシル渓谷に存在した重要な銀鉱山が九五〇年頃^{②①}に閉鎖されたことにより、さらに加速されたかもしれません。

九四五／五年、デイルハムのスウェーデンへの流入は突然停止しました。新しい貨幣がルーシとポーランドに（量は少なくとも）輸出され続けていたのであれば、この事象を次の事象と関連づけたい誘惑にかられます。つまり『ロシア原初年代記』で確認できる、キエフ公国の女性統治者オルガによるロシア北部の河川に対する直接支配の確立です。^{②②} イスラーム銀の供給量が次第に少なくなる状況に直面したルーシのエリート層は、スカンディナヴィアから、キエフとノヴゴロドという彼らの政治的中核地へ、そして



地図 3 : 10 世紀のディルハム埋蔵宝、貨幣製造所、主要交易路

奴隷のためのデイルハム（ヤンコヴィアク）

ポーランドの奴隷供給者へとデイルハムの流れを変更しました。しかし高品質のデイルハムの不足とその結果としての中央アジアとの交易の退潮を回復させることはできませんでした。九八〇年頃にデイルハムの流入は停止しました。その後数十年にわたって従来通りの交換を再生しようとの手立てが取られはしましたが、サーマーン朝の解体、中央アジアの政治的不安定、一一世紀ユーラシア西部の経済に襲いかかるであろういわゆる「銀の危機」の開始によって失敗に終わりました。その結果、九八〇年以降は北ヨーロッパにイスラーム貨幣はほとんど到達しなくなり、北方の埋蔵宝に見える最後のデイルハムに刻まれる年号である一〇一三／四年以降は全く確認できません。

このようにデイルハム埋蔵宝は北ヨーロッパとイスラーム世界東部の交易のクロノロジーと地理を細部に至るまで再構成することを可能にしてくれます。しかしこれが話の全体ではありません。記述史料はしばしばイスラーム化した西欧とりわけスペイン（アンダルス）においてもサカリバ出自の奴隷について言及しています。そこではスラヴ出自の奴隷軍人が一〇世紀における（アンダルス・）ウマイヤ朝カリフの統治の柱の一つをなしていました。それら奴隷の主たる供給地はプラハと考えられます。そこでは一〇世紀に活発な奴隷市場が史料上確認できます。しか

し、こうした交易のメカニズムは、前述したメカニズムとは全く異なっていたはずで、そのことを示唆するのは、一つは、北ヨーロッパではスペインのデイルハムが全くと言っていいほど発見されないこと——そのためクロノロジーの詳細な再構成は不可能です——です。そしてもう一つは、文字史料が示唆するところによれば、アンダルスと中欧間の交易が、マインツやヴェルダンのような西欧で生じつつあった都市に存在する商人コミュニティが鎖のように連なることで、短距離交換の連続体から構成されていたことによって、です。このような交易のあり方は商人の離散拡大、とりわけユダヤ人の離散拡大に適していました。そうしたあり方が一〇世紀における中欧、とりわけザクセン、ボヘミア、ポーランドへ拡大することにより、スラヴ人奴隷の輸入がイスラーム・スペインに関わることで刺激されたように思われるのです。少なくともそれは、九二〇年代から一〇一〇年の間に頻出するアンダルスにおけるサカリバの言及、そして一〇世紀後半におけるプラハを中心としたチェコ国家の頂点と一致しています。

二 奴隷と銀…需要と供給

以上の分析にしたがえば、九・一〇世紀において、スベ

インやアイルランドからウラル山脈やパミール高原に至るユーラシア西部全域にまたがるネットワークが立ち現れてきます。とはいえ、本当に奴隷交易を、そのネットワークの生成に連なり、二世紀に渡ってそれを支えた主要な原動力として特定しても良いのでしょうか。北ヨーロッパからイスラーム世界へ輸出されたもう一つの産品である毛皮では、中欧や東欧への交易システムの拡大を説明できません。最高品質の毛皮は、考古学者が山のように積み重なった毛皮動物の骨を特定することで判明したように、北極圏近くの極北から流入していました。⁽²⁶⁾ 奴隷交易に関しては、スカンディナヴィア人とムスリムとの間での交換におけるその役割を査定するために、イスラーム側の奴隷に対する需要と、それと対になるスカンディナヴィア側の銀に対する需要に対して、さらに接眼してみる必要があるでしょう。

イスラーム側の奴隷需要

すでに我々が確認してきたように、数百万や数千単位位のデイルハムが九・一〇世紀の北ヨーロッパに輸入されてきました。この数値が一〇〇万から二〇〇〇万の間にありと仮定し、奴隷が一人当たり平均一〇〇デイルハム（記述史料によって裏書きされます）とするならば、そのようなデイルハムの流れは一〇万から二〇万人の奴隷の売買、

言い換えれば、交易システムが完全に機能していたとして、この二〇〇年においては一年あたり数千人の奴隷の売買と同等の数値になります。これは、近世の大西洋奴隷貿易が一六世紀末になってようやく到達した規模に匹敵します。⁽²⁷⁾ この点に関してより印象深いのは、近代の奴隷が大西洋をただ船で渡ってゆくのに対して、サカールリバは数千キロメートルを徒歩で移動せねばならなかったことです。しかしこの推計値は、我々が知るサカールリバの奴隷と照らし合わせた場合に、もっと言うのであれば、イスラーム世界の奴隷制度と照らし合わせた場合に、現実を反映しているのでしょうか。

九世紀から一〇世紀のアラビア語史料はしばしばサカールリバの奴隷に触れています。例えば、九世紀イラクで活躍し、多数の著作を残した著述家ジャーヒズは、『動物の書』において、双子の兄弟の例を引きながら、サカールリバにおける去勢の影響を論じています。

「彼らのうち一方は去勢されると、より良い従者となり、あらゆる活動と手作業においてより洗練された：会話をするとあなたは彼がより知的であるとわかるだろう。彼の「去勢されてない」兄弟は生まれながらの愚昧、自然な愚かさ、スラヴ人の単純な心にとどまっている。彼は外国語を理解

奴隸のためのデイルハム（ヤンコヴィアク）

することもできないだろう。彼の手は不器用なままで上手になることはないだろう。というのも彼の知性は訓練されることはないだろうからだ。彼は自らを自由にそして雄弁に表現することもできないだろうし、はっきりと発音することもできないだろう。サカーリバ（奴隸）の去勢による最初の結果は、彼の知性の純化、彼の洞察の鋭化、彼の本性の強化、彼の心の刺激なのだ。」

一部冗談交じりかもしれませんが——ジャーヒズはユーモアと皮肉で知られています——、以上の引用も、スラヴ人奴隸が九世紀のイラクにおいて珍しくないこと、そしてそれらがしばしば去勢されていることを示唆しています。ジャーヒズの証言は、サカーリバ奴隸を従者、護衛、官僚としてアッバース朝カリフの母として言及する数多くの史料によって確認されます²⁹。彼らは殊の外イスラーム・スペインとの関連で言及されることがあります。その地のカリフは「可能な限り奴隸を多く集めようとした。アブドゥッラフマーン三世とハカム二世は彼らを最も近い友とした」³⁰。一〇世紀半ばにおいて、「アブドアッラフマーン三世（九一二—九六二）は数千人のサカーリバ奴隸をマディーナ・ザフラーの宮殿に所有していたと言われていた。」北アフリカのファーティマ朝カリフ、ムイッズ（九五三—

九七五）は、その護衛役と意思疎通するために、サカーリバの言語を学んだと伝えられています。

史料のほとんどは、ムスリム君主の宮廷というコンテクストとの関連で、サカーリバ奴隸について言及しています。彼らのほとんどは私有の対象ではないように思われます。これは、一つにはエリート層に集中する史料のバイアスのために、一つには文献上の証拠が不足しているためなのかもしれません。サカーリバに対する需要のほとんどは、ムスリム君主の宮廷によって生み出されていたと言つて良いでしょう。エキゾチックな若い男女の奴隸は、君主のハーレムや従士団に華やかさを付加しました。より重要なことは、彼らは出身家系とは切り離されており、その結果として完全に所有者に依存していたことです。そのため古来の部族や都市エリートよりもたやすくコントロール可能であり、ムスリム君主に支配の基盤を与えていたことを意味します。さらに、彼らの多くが去勢されていたとすれば、彼らが家族を持つこともほほななければ、新しい貴族層を形成することもあり得ませんでした。

イスラームの奴隸制は、重要な点において、ローマや初期近代の奴隸制という古典的なケースと異なることは心に留め置くべきです。イスラーム側の奴隸に対する需要は、労働需要によって引き起こされたものではありません。

我々は時としてイスラーム世界における大規模な農業奴隷を耳にすることはありますが、そのことを奴隷に対する需要の主たる源泉と特定するのは極めて稀な事例においてのみです。奴隷化された人間に対して求められる主要な労働形態は家政諸事と推測されます。一般的に、イスラーム奴隷は、典型的なローマやアメリカの場合よりも家政に緊密に統合されていたように思われます。だからと言って奴隷の濫用や収奪が必ずしもなかったことにはなりませんし、奴隷に対する需要が低く抑えられていたわけでもありません。すでに見たように、ムスリム君主の家政では、戦士、妾、官僚などとして何千人もの奴隷が仕えていました。しかし我々は、「奴隷」という用語と本能的に結びつけている奴隷制とはかなり異なる奴隷制をいま目にしています。ここには何重にもわたる含意があり、若者よりも若い女性や子供に対する需要が高いことや、そうした捕虜が守られたり移送されたりする関連事例に出会います。

しかしこれらのいずれも、なぜ奴隷がこれほどまで遠隔地からイスラーム世界へ輸出されたのかは説明できません。たとえムスリムが隣接諸国から無尽蔵の捕虜を獲得可能であったとしても、です。

スカンディナヴィア側の銀に対する需要

その答えは、イスラーム世界の側ではなくスカンディナヴィア側にあると確信しています。両世界の奴隷交易に対する主たる刺激は、イスラーム側の奴隷に対する需要——それは非イスラームの隣接集団に対する略奪や遊牧諸族との交易のような他のやり方では満たされません——というよりも、スカンディナヴィア側の銀に対する需要です。このことはとりわけ銀の供給が低下する時は常に（つまり九世紀の最後の四半世紀に）交易の頻度が低下することによって、北ヨーロッパにおけるデイルハム以外のイスラーム起源の産品がわずかになることによって、なかでもヴァイキング時代のスカンディナヴィアで銀が果たすようになる役割によって推測されます。

バルト海に浮かぶゴットランドで発見された少なくとも五〇〇の埋蔵宝という注目すべき集中の度合いは論点となります。その事実が、ゴットランドの例外的な富とそれがバルト海の交易ネットワークの中核的位置を占めていることとの反映であるのか、それとも貨幣として銀を利用しない——その結果埋蔵された——孤立経済であるのかを巡って歴史家も考古学者も長期にわたって議論してきました。ゴットランドのミステリーは二つの問題に要約されます。一つはこの島で銀がどのように利用されたのかであり、も

奴隷のためのデイルハム（ヤンコヴィアク）

う一つはなぜ埋蔵宝はその所有者により地面から掘り起こされなかったのか、です。

推計で二〇〇〇に及ぶ、ヴァイキング時代ゴットランドの家族農場数は、およそ五〇〇という現在知られる埋蔵宝が本来存在していたであろう数とほぼ同数であることは注記しておくべきでしょう。この事実は、ほぼ全てのゴットランドの農場がデイルハム埋蔵宝を所有していたという印象を与えます。それと同時に、ゴットランドでは個別発見貨が全くとっていいほど欠如していることから、銀が日常の取引では貨幣として用いられていなかったことも示唆されます。もし我々が埋蔵宝に関する儀礼面からの説明、つまり来世のための富の蓄蔵であるとか土地分割のシンボリックな境界化といったような説明を受け入れるとすれば——私はそれを支える十分な理由はないと思います——、埋蔵宝であるデイルハムは、何人かの歴史家が「社会取引」（social transactions）と呼ぶものとして利用されていたとする結論を避けることは難しいでしょう。そのような「取引」の、おそらく最もありふれた事例の一つは、婚資の支払いを要求する結婚です。この点において、アイスランドのサガで見られる、武装した戦士でいっぱいになった船に乗り込み、「東方へ船首を向け急いだ。そこで彼らは多数の富を手に入れ、数多の戦いを繰り返した」十

代のヒーローについて思いを致します^③。このような富のおかげで、彼らは威信をまとい、花嫁を見いだすことができ、家族をなし、世帯を築くことが可能となりました。サガは、彼らが「多数の富を手に入れ」るやり方については雄弁ではありませんが、そこで確認できる記述は、捕虜の奴隷化と、そうした獲得した奴隷をデイルハムとの交換でムスリム商人に売却していたことと一致します。我々はスラヴ諸国の考古学が、奴隷捕獲が暴力をともしなう生業であると確認することを後述しましょう。

そうであるならば、銀はゴットランドでも、そのほかのスカンディナヴィアでも、スカンディナヴィア人が定住する場所でも（例えばルーシ地域）、彼らの文化モデルの影響を受けた地域でも（例えばポーランド）、社会組織の鍵となる要素であり社会ステータスの標識であったと言えるでしょう^④。ゴットランドに特徴的であるのは、埋蔵宝に付加された重要性やデイルハムへのアクセスの容易さではなく、これほどまでに多くの埋蔵宝が埋蔵されたままで止まっているという事実です。それらは、そもそも掘り起こされることが意図されていなかったのではないのでしょうか。しかしそうだとすれば、この事実は、埋蔵に対する儀礼面での説明へと私たちを導くことになりますが、そこで満足のいく答えは得られません。さらに、ゴットランド人

の儀礼的行動はその他のスカンディナヴィア人の行動とは本質的に異なることを示唆するものもあります。ゴットランドの特殊性、より具体的に言えば、その島嶼性を考慮に入れた説明に求めた方が安全でしょう。

バルト海の中央部でゴットランドが孤立していることは（最も近い海岸からでも九〇キロメートル離れている）、キリスト教そして中央集権統治のモデルがこの島に到達することを遅延させました。いずれもスカンディナヴィア本土へは一〇世紀の間に導入され、埋蔵に対する心的態度へある種のインパクトを与えた要素です。キリスト教はゴットランド人に教会施設へとこれ見よがしの財産の使い道を振り替えさせ——ゴットランドは早期かつ緊密な教区ネットワークを誇っています——、結婚に関わるメンタリティを変更させた一方で、国家は徐々に、処分可能な貨幣という富を吸収する課税制度をもたらししました。「ゴットランドの例外」は、通常ではないクロノロジーにおいて、こうした展開から構成されています。一一世紀におけるキリスト教の到来は、スウェーデンの中央権力がこの島に手を伸ばすよりも一世紀も先んじていました。この時までに、銀の埋蔵宝はありあまるほどとなっており、地中に忘れ去られていたのでしょうか。その点は、ゴットランドに生成しつつある国家（社会）の構造が、キリスト教が社会規範を変更

する前に埋蔵宝を収奪したルーシ国家やスウェーデン本土とは異なっていると言えます。

ゴットランドの事例の解釈は、スカンディナヴィア人の銀に対する渴望がどのような点において、その社会構造によって条件づけられているのかを示しています。そのことは、なぜスカンディナヴィア人（とその文化モデルに影響を受けた集団）が、あらゆる手段を尽くして銀を獲得しようとする躍起になっていたのかをも理解する手助けとなります。その手段とは、アングロサクソン期イングランドやカロリング帝国への襲撃、ビザンツ帝国における傭兵業、一一世紀ドイツにおける、今なお特定されていないなんらかの活動、イスラーム世界における奴隷交易です。これらの試みは銀の供給が底をつきその他の代替物が入手可能となった時点で終わりを告げました。これは一〇世紀後半におけるスカンディナヴィアと中央アジアとの交易の事例であり、その時サーマン朝の貨幣の質の劣化とザクセンにおける銀鉱山の発見がスカンディナヴィア人の関心をイスラーム世界から外させました。イスラーム側の奴隷に対する需要も北ヨーロッパにおける捕虜の入手を限定するファクターでした。そのことは、少なくとも一三世紀に至るまで北ヨーロッパにおける奴隷獲得が継続していたこと、そしていくつかの点において今日に至るまでイスラーム世界

奴隷のためのデイルハム（ヤンコヴィアク）

に奴隷制度が残存していることから見て取れます。中央アジアとの交易は高品質の銀が入手可能である限りにおいて継続したのです。

三 影響…北ヨーロッパにおける国家形成

イスラーム世界との間の奴隷交易は、一〇世紀末にその重要性が徐々に失われてゆくまで十分長期にわたり継続した結果、北ヨーロッパに重要な社会的、経済的、政治的変容を引き起こすに至りました。それらは究極的に、スウェーデン・ポーランド・チェコ・ハンガリー・ルーシ（今日のロシア、ウクライナ、ベラルーシの祖）のような、今日なお存在するいくつかの国家の誕生へと結実しました。ここ二〇年における北ヨーロッパ考古学が達成した瞠目すべき進展は、奴隷交易と国家形成との間の関係を確立すること、を今や可能としたのです。

奴隷制の考古学

しばしば「目に見えない商品」(invisible commodity)と呼ばれた奴隷を扱う奴隷交易は、ほとんど考古学的痕跡を残さないと考えられてきました。しかし今や「奴隷の考

古学」という概念はもはや語義矛盾であるとはみなされていません^{③⑥}。鉄製の拘束具のようなモノや拘束された四肢が結びつけられた状態の遺体を葬った墓地であれば奴隷制を示唆してくれるでしょう。複数名が葬られ（例えば豊かな装飾品のある若い男性の足下に）、隷属状態に置かれた遺骨を見出しうる複合墓地のような発見物は、それらが女性であり、アイソトープとDNA解析がそれらの栄養状態の悪さと現地出身ではないことを指摘するならば、墓地において供儀とされた奴隷の遺体として解釈されるかもしれません^{③⑦}。しかしこのようなタイプの証拠は常に解釈の際に一定程度の曖昧さを残しますし、別の解釈を排除することは常に不可能です（例えば上記事例においては自由恋愛の結果の可能性もないとは言えません）。

大規模奴隷交易システムの考古学的痕跡を探索するために、ここ数年来、より洗練された方法論がアフリカ、アメリカ、古典古代、先史それぞれの考古学において発展してきました^{③⑧}。その方法論が焦点を合わせているのは間接的な証拠、つまり奴隷の獲得とその交易を伴う現象です。これらに含まれるのは、暴力の突然の出現（広範囲にわたる居住地の破壊や不具とされた身体によって証拠づけられる）、一般的な不安（例えば、防備施設の数増加によって証拠づけられる）、戦士エリート^{③⑨}の突然の出現、輸入された奢

侈品の出現、そして人口減少です。これらの現象は、奴隷交易に関する記述史料と相まって、大規模な奴隷狩りが高い確率でありそうであることを指摘しています。

この二〇年、以上のような証拠が、考古学的発掘の劇的な数的増加（とりわけ当該地域内での経済成長と多くのインフラ計画を理由として）ならびに年代測定技術の進展の結果として、北ヨーロッパにおいて入手可能となってきました。それらの中で最も重要なものは、年輪から年代が測定可能な年輪年代測定法（dendrochronology）です。それはしばしば当該木材が切り倒された年代を確定することを可能にします。この手法は、中東欧においては木材が共通の建築材料であったこととそこでの湿潤な土壌が木材を状態良く保存させていたため、とりわけスラヴ考古学において有効であったのです。

近年の考古学研究から立ち現れる、九・一〇世紀のスラヴ地域像は、暴力の遍在によって特徴付けられます。破壊された居住地、燃やされた家屋の中に散逸する人間の骨、切り落とされた頭や四肢、若い男性の集団墓がありふれています。そうした破壊を示す層位は、一〇世紀の中東欧のほとんどの地域を覆っているという印象を受けます。暴力の次に来るのは不安であり、その結果、数百もの小規模防備施設が建設されました。こうした不安の感情は現実の危

険に対応しているのだということは、ヴィエルコポルスカの西部と東部、マゾフシェ北部、リヴィウ地域、そしておそらくウクライナ東部のロムヌイ文化領域のようなかなりの地域において人口減少が起こったことによって示されます。もっとも、これらの地域のいくつかに関してはなお証拠が不確かではありますが。

では、中・東欧の人々はどうのような危険に直面していたのでしょうか。この問題に対して考古学が直接答えることはできませんが、次の点は特筆すべきでしょう。つまり、新しいエリート戦士文化の誕生が確認できる地域において、人間が消滅しつつあったということです。そうした文化は、馬、洗練された武器（しばしば北欧起源）、特徴的な土器スタイル、輸入された威信財、そして何をおいてもまず、我々がアラビア語史料から確認できるように、奴隷と引き換えに支払われたデイルハムによって特徴付けられます。これらの諸要素を連関させるとすれば、九・一〇世紀のスラヴの地が捕虜の狩場であったという結論を覆すことは困難です。

ある種のタイプの証拠はとりわけ重要です。近代の東ドイツ、ポーランド、チェコ共和国、ウクライナ西部に広がる数百にものぼる初期中世の防備施設のなかで、一群の非常に大きな複合体が目立っています。それらは、西はボヘ

奴隷のためのデイルハム（ヤンコヴィアク）

ミアからポーランド南部を経て、東はウクライナ西部にまで広がる地域に、一〇世紀に建設されました。その表面部はボヘミアやポーランド南部では二〇から三〇ヘクタール、ウクライナ西部では四〇〇ヘクタール（四平方キロメートル）に達します。この防備施設群は典型的とはいえない多くの側面を示していますが、そうした側面を最もよく示すのは、それらの中の最大のものの一つである、ウクライナ西部のプリスネスクの防備施設です。

防備施設プリスネスクは、建造物複合体の中央部から一キロメートル以上先まで伸びている、最低でも六つの同心円状に位置する塁壁で防備された尾根の上に立地しています。さらなる塁壁が、複合体本体の下手に広がる溪谷をさらに取り囲んでいました。施設全体の総延長は一九キロメートルに及び、占有面積がおよそ四〇〇ヘクタールに達するプリスネスクは、中東欧で最大の防備施設の一つとなっています。相当の労働力を投資して建設されたはずの施設内に人が居住していた痕跡はほとんどありません。継続的に利用された家屋が確認できるのは中央部分のみでした。それとは対照的に、外側の部分の非常に薄い（生活痕を示す）層位は、この区画への居住が一時的なものに過ぎなかったことを示しています。このような一時性は、複数の塁壁、トレンチ、柵によって細分された複雑な内部構造

とは対照をなしています。それはまるで人間が自由に行き来できないかのような造りです。（そのほかの多数の巨大防備施設と同じように）プリスネスクの近隣に居住する人もほとんどいませんでした。そのようなわけで、この複合体が部族の政治的中心地であったり避難所であったりする可能性もありません。しかし、この施設の近くでデイルハム埋蔵宝が発見されたことで、別の解釈の可能性も出てきました。捕虜の中で最も魅力的な部類を、ブルガールやプラハといった当時随一の奴隷市場に送り出す前に、一旦集積し保護するための一時的な収容所であり、そのほかの残った奴隷が現地戦士階層のための余剰を生産するようにとどめ置かれた、という説です（図3）。

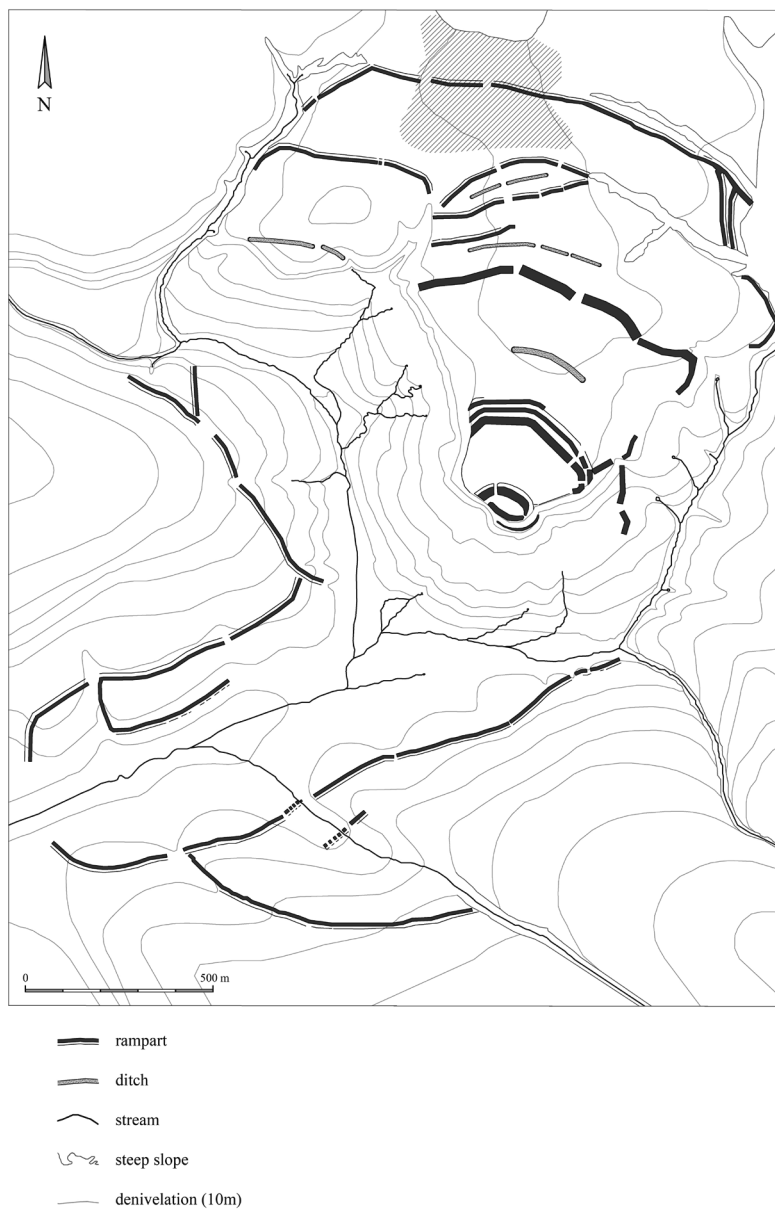


図 3

防備施設プリスネスクの簡略図 (M. Fylypchuk, *Slov'ians'ki poselennia VIII-X st. v ukrains'komu Priikarpatti* (L'viv, 2012))

奴隷のためのデイルハム（ヤンコヴィアク）

以上の解釈は地理的論理によって支持されます。巨大防備施設は、河川交通が可能ではない山岳地に位置しています。それゆえ捕虜は陸上を輸送されねばなりません。サハラ以南との奴隷交易によって示されるように、それらを移送する最も経済的な手段は大きな規模に護送することです。相当数の捕虜を集めることは時間を要しますし、その結果として巨大な捕虜収容施設の必要性が生み出されました。

近年の考古学的作業から立ち現われる九・一〇世紀における中東欧での騒擾という図は、古銭ならびに記述史料に基づく大規模奴隷交易の図と一致します。一〇世紀における暴力、奴隷交易、国家形成という三者の関係を明らかにする余地は残されているのです。

部族から国家へ

ヨーロッパのスラヴ地域に関する国家形成に関する現在のナラティヴは、主として近代国家とネイションの起源を説明するために推し進められてきました。それゆえ本来の部族が国家性を獲得するゆつくりとした進化の主たる要因として内的プロセスを強調します。このような見方において、小部族は段階的により大きな、より洗練された構造を持つようになり、社会的差異を増加させ、エリートが形成

されるようになってきます。ある時点において、これらの新興エリートは、以前はより民主的な統治を行っていた共同体において権力を独占します。このプロセスはしばしば自生的なものとみなされます。すなわち、部族社会の自然な傾向として国家を志向する方向に発展するのです。（地域支配者に彼らによる統治を正当化するイデオロギーを与える）キリスト教化や隣接諸族（何をおいてもドイツ王国）による軍事圧力といった外的要因もまた認められはするものの、通常は二次的な重要性しか与えられません。

このナラティヴに関してはいくつか問題が存在します。以上のような進化を引き出した衝撃の正確な本質はなおはっきりとはしませんし、国家なき社会が洗練されていないであるとかそれらが必然的に国家へと向かうものだとする仮定は誤りとして示されます。^② まずもって安定したスラヴ人集団などあるのかどうかという点で議論の余地があります。彼らの一覧表として最初期のものである、「バイエルン人の地理学者」として知られる九世紀のテキストは、八五〇年ごろにバイエルンで編纂されたものと考えられます。そこには八五のスラヴ諸族が記録されており、そのほとんどは他のテキストでは再び記録されてはいません。そのことから、九・一〇世紀のスラヴ人血脈の部族地理は極めて流動的であることが示唆されます。しかし国家形成の

進化論的モデルは考古学の進展により、とりわけ年輪年代測定法の到来により最後の一撃を受けます。このような挑戦がいかに大きなものであったのかは、ポーランドの事例が示してくれるでしょう。

ポーランドは、ヴィエルコポルスカ（現代のポーランド西部）に位置し、伝統的に八世紀、場合によっては七世紀に比定される一群の防備施設（ポズナニ、グニエズノ、オストロウ・レズニチ、ギエチ）の周りに成立しました。九六〇年という、記述史料最古の言及よりも二、三世紀遡る時代です。この期間は、上述した進化プロセスに十分な時間を残しています。こうしたコンテクストにおいて、年輪年代分析の結果は二〇年前に驚くべきものとして立ち現れました。これらすべての防備施設が九四〇から四一年にかけての冬もしくはそれに近接するときに建設されたか、もしくは大きく拡大されたことが判明しました。最初のポーランド国家の建設は、記述資料で完全に形成された全体としてそれが立ち上がる二、三世紀前では決してなく、たった二〇年前ということになりました。

防備施設群の建設は、九三〇年代と四〇〇年代というヴィエルコポルスカにおける最初期のデイルハム埋蔵宝の出現と同じ時期であり、その一〇から二〇年後に、その広大な地域からその西部ならびに東部へと人口流出が続いているま

す。ここで我々は諸要素を組み合わせてみましょう。巨大防備施設の建設、隣接地域への人口流出、デイルハムの流入そしてそこから推測される奴隷交易への参与、です。

こうした証拠を受ける一つの想定しうる解釈は、九四〇から四一年にかけての冬の少し前に、ヴィエルコポルスカ出身の戦士集団が、中東欧の河川を超えてスカンディナヴィアへ移動するデイルハムの流れにアクセスしたということです。すでにここまで見てきたように、この時点がスカンディナヴィアとイスラーム世界との交易の最高潮であり、それゆえに、奴隷に対する需要は高まっていました。ヴィエルコポルスカの戦士らはその需要を満たすだけの状況に置かれていました。これまで奴隷狩りに晒されている、相対的に人口が密集している地域が彼らの周囲には広がっていました。次のように想定できるかもしれません。すなわち、一七世紀から一八世紀のアフリカの君主がヨーロッパの商人に対して、大西洋の向こう側での搾取に供するために捕獲した隣人を供給していたのとさほど違わないやり方で、ヴィエルコポルスカの首領たちはスカンディナヴィア人に対し、銀やその他の威信財と交換で、隣接部族から獲得した捕虜を売却していた、と。その結果、彼らはその財を戦士たちに再分配し、その結果として依然として高まり続けていたデイルハムや威信財に対する需要サイク

奴隷のためのデイルハム（ヤンコヴィアク）

ルの引き金を引き、次第に強力になっていった軍事組織が、増え続けていた奴隷の捕獲を通じてそれらを獲得した、と。

二〇年以内に、この軍事組織は、隣接するドイツやチェコから国家として認識されるほど十分に強固な存在となっていました。これら隣接国との接触は、ポーランドの安定性につながる二つの結果を生み出しました。一つは、減少するデイルハムの流入に置き換わる別の収入の源泉を提供したことです。ドイツにせよチェコにせよ、ヴィエルコポルスカの戦士によって供給される捕虜に対して銀で支払うことは可能でした。もう一つは、ポーランド君主ミエシユコを、九六六年のキリスト教への改宗を通じて正統と認めたことです。キリスト教的王権イデオロギーとドイツ皇帝による承認を得たことで、ミエシユコは国家を統合し、その結果、歴史の舞台へと参入したのです。

ポーランドの事例は孤立例ではありません。デイルハムの流れは同様のメカニズムをスウェーデンやルーシの様々な地域に引き起こしました。安定した領域構造を創出する試みは必ずしも最終的に成功したわけではありませんでした。ウクライナ西部のプリスネスクその他にある大規模防備施設を建設したと想定される集団は——それはいくつかの一〇世紀の史料から知られているレンジアニエ（Lendzianie）族におそらく同定できます——九五五年こ

ろに突然雲散し、その後の道のりをたどることができなくなったようです。しかし他の場所、例えばキエフにおいては、中央アジアとの奴隷交易によって生成した在地エリートが、一〇世紀半ばにサーマーン朝の貨幣打造が退潮したのち、威信財と政治的正当性の新しい供給源を見いだすことに成功しました。キエフの場合はビザンツ帝国です。デイルハムの流入が途絶したのち北欧や東欧で生成しつつあった政治体によって採用された異なる道行は、かくしてその後数世紀に渡る歴史を定義づけたのです。

結論

交換の本来的な不安定さ、奴隷供給の流動性、デイルハム生産の変動の激しさ、遊牧民からの持続的な危険、長くなりすぎた連絡線といった問題があったにもかかわらず、北・東ヨーロッパとイスラーム世界間の交易はほぼ二世紀にわたって継続しました。そのことがユーラシア西部にもたらした結果は大変大きなものでした。例えば、東スカンディナヴィア人がイスラーム銀へアクセスをすることで、デンマークやノルウェーの西スカンディナヴィア人もまた刺激を受け、カロリング朝やアングロサクソン国家から貴金属を収奪する動きを見せました。いわゆる西欧へのヴァ

イキング侵入時代です。イスラーム世界においては、スラヴ人奴隷が、イスラーム・スペインの（アンダルス・）ウマイヤ朝のカリフらが国家を中央集権化する際に決定的な役割を果たす一方で、中央アジアからの制御できない銀の流れが、サーマーン朝の衰退、そしてチュルク系遊牧民による交代劇に寄与したかもしれません。そのほかの遊牧民は、ムスリムとの緊密な接触にさらされていることを自覚しました。その結果として、多くの人々がイスラームへと改宗しました。しかし、スカンディナヴィアならびに東欧のスラヴ人の地における政治的、社会的、経済的、宗教的景観の根本的な再編こそが、九・一〇世紀におけるスカンディナヴィアとイスラーム世界の間の交易において最も持続的な結果であり続けたのです。

本訳稿の作成にあたっては、著者であるマレク・ヤンコヴィアク博士、そして成川岳大氏と橋爪烈氏に多大な援助を賜った。ここにお礼を申し上げます。ただし、本稿の訳語や訳文の解釈は訳者である小澤の判断においてなされたものであり、すべての責任は小澤に帰する。

註

(1) 二〇一三年から一七年のイギリス芸術人文学研究会議の助成を受け、オックスフォード大学ハトリ研究センターを拠点とした「奴隷のためのデイルハム・北ヨーロッパのデイルハム埋蔵宝、スラヴ人奴隷交易、中世ヨーロッパの生成」プロジェクトのおかげで、この論考は成稿した。プロジェクト期間に共同研究を進めたジョナサン・シェパード、リユーク・トレッドウェル、ヤチェク・グルシユチンスキ、そして東京へ招待してくれた小澤実と加藤磨珠枝に感謝したい。本稿の最初のバージョンは、二〇一七年七月二〇日と二二日に立教大学で読み上げられた。

(2) 例えばポーランド、エストニア、フィンランドのように、発見数が相対的に少ない国に関しては良いカタログが存在する。北ヨーロッパのデイルハム埋蔵宝の包括的カタログはトマス・ヌーナンによって編纂されつつあったが、二〇〇一年に彼が死んだことで刊行は遅れている。これら資料のうち幾らかはヌーナンとその弟子ロマン・コヴァレフによって刊行された数多くの論考で入手可能である(Roman K. Kovalev, “Bibliography of Thomas S. Noonan”, *Russian History*, 28 (2001), pp. 7-28)。ロシアではこの数年代数多くの埋蔵宝の情報が刊行されたが、地方刊行物であるため未だに参照が困難である。

(3) ケネス・ヨーンソン(ストックホルム)、ヴィアシェスラフ・クレシヨフ(サンクト・ペテルブルクならびにストックホルム)、マテウシユ・ボグチ(ワルシャワ)、

ドロタ・マラルチク(クラクフ)、ヴァレンティン・レバデフ(ニジニ・ノヴゴロド)らの助けがなければ、私の調査を進めることはできなかったであろう。私は彼らに感謝したい。

(4) Michael McCormick, *Origins of the European Economy: Communication and Commerce, A.D. 300-900*, Cambridge, Cambridge UP, 2001; Id., “New light on the Dark Ages: how the slave trade fuelled the Carolingian economy”, *Past and Present*, 177 (2002), pp. 17-54.

(5) 例えば McCormick, *Origins*, Map 24.1 (p. 762) を見よ。

(6) 多数の個別発見貨はあるが埋蔵宝を構成していないトルソ、(ゴットランド中央部の) ルーム、カウパングのようなヴァイキング時代の交易地(*emporía*) 出土の発見貨幣は除外している。

(7) しかしこれらの貨幣はデイルハムよりかなり軽量である(前者は〇・八一―五グラムであるのに対し後者は三グラム)。

(8) 例えば Marek Jankowiak, “Silver fragmentation: reinterpreting the evidence of the hoards”, Jane Kershaw and Gareth Williams (eds.), *Silver, Butter, Cloth. Monetary and Social Economies in the Viking Age*, Oxford, Oxford UP, 2019, pp. 15-31。

(9) トマス・ヌーナンのカタログに基づく類推の推定値である。Roman K. Kovalev and A. C. Kaelin, “Circulation of Arab silver in medieval Afro-Eurasia:

preliminary observations”, *History Compass* 5 (2007), pp. 560-580, at p. 563.

- (10) P. Lunde and C. Stone, *Ibn Fadlan and the Land of Darkness: Arab Travellers in the Far North*, London, Penguin Books, 2011, p. 126.

- (11) サカーリブにふつは 例へば P. Guichard and M. Meouak “al-Sakaliba”, *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Leiden, Brill, vol. 8, pp. 872-81, esp. pp. 879-80; David Ayalon, *Eunuchs, Caliphs and Sultans: A Study in Power Relationships*, Jerusalem, Magnes, 1999, Appendix I.

- (12) Lund and Stone, *Ibn Fadlan*, pp. 45-48 [家島彦一訳注『ヴォルガ・ブルガール旅行記』平凡社「二〇〇九年二六一頁」].

- (13) ファミラーンの説明にふつは Jonathan Shepard and Luke Treadwell, *Muslims on the Volga in the Viking Age: Diplomacy and Islam in the World of Ibn Fadlan*, London, forthcoming.

- (14) その他のアラビア語史料にふつは Lund and Stone, *Ibn Fadlan* を参照。

- (15) 地理用語としてのルーシは、ベラルーシ、ロシア、ウクライナという近代の諸国家の中世の祖先を意味している。エスニックな意味におけるルーシは、この領域に定住するスカンディナヴィア人を記述している。

- (16) Marek Jankowiak, “Flows of dirhams and rhythms of the slave trade between the Islamic world and north-eastern Europe”, in: Jonathan Shepard,

Jacek Gruszczyński, and Marek Jankowiak, *Viking-Age Trade: Silver, Slaves and Gotland*, London, Routledge, forthcoming.

- (17) D.E. Mishin, *Sakaliba (slaviane) v islamskom mire v rannee sredneevkov'e*, Moscow, 2002.

- (18) C. Zuckerman, “Deux étapes de la formation de l'ancien état russe”, in: M. Kazanski, A. Nersessian et C. Zuckerman (eds.), *Les centres proto-urbains russes entre Scandinavie, Byzance et Orient*, Paris, 2000, pp. 95-120 を参照。

- (19) Mašudi, *Muruj al-dhahab*, French tr. Ch. Pellat, *Les prairies d'or*, 5 vols, Paris, Société asiatique, 1962-97, vol.1, pp. 165-7.

- (20) 模倣貨にふつは以下を参照。Gert Rispling, Marek Jankowiak and Luke Treadwell, *Catalogue of Dirham Imitations from Northern European Viking-Age finds* (in preparation).

- (21) Marek Jankowiak, “Metallography and history: interpreting the trace elements in Islamic coins” (forthcoming).

- (22) S.H. Cross & O.P. Sherbowitz-Wetzor, *The Russian Primary Chronicle: Laurentian Text*, Cambridge, Mass., Harvard UP, 1953, p. 81 [國本哲男・山口巖・中条直樹訳『ロシア原初年代記』名古屋大学出版会「一九八七年「七五頁」」]。以下で与えられている九四六／七という年号は『年代記』の初期の部分のほとんどの年号と同様に「おおよその数値」である。

- (23) Mohamed Meouak, *Saḡātib, eunuques et esclaves à la conquête du pouvoir : géographie et histoire des élites politiques "marginales" dans l'Espagne umayyade*, Helsinki, Academia Scientiarum Fennica, 2004.
- (24) Lunde & Stone, *Ibn Fāḍlan*, pp. 164-5 (relation of Ibrahim b. Ya'qub); D. Třeštík, "Eine große Stadt der Slawen namens Prag (Staaten und Sklaven in Mitteleuropa im 10. Jahrhundert)", in: P. Sommer (ed.), *Boleslav II. Der tschechische Staat um das Jahr 1000*, Praha, 2001, pp. 93-138.
- (25) Marek Jankowiak, "Infrastructures and organisation of the early Islamic slave trade with northern Europe", in: Fanny Bessard and Hugh Kennedy (eds.), in preparation.
- (26) Roman K. Kovalev, "The infrastructure of the northern part of the 'Fur Road' between the Middle Volga and the East during the middle ages", *Archivum Eurasiae Medii Aevi* 11 (2000/1), pp. 25-64. ディールハム埋蔵宝が発見された地域からはそのような遺物は知られていない。
- (27) <http://www.slavevoyages.org/assessment/estimates>
- (28) Al-Jāhīz, *Kitaḥ al-Hayawān*, 1, 116-118; 翻記はミトヲ著「ペ」。T. Lewicki, *Źródła arabskie do dziejów Słowiańszczyzny*, 1, Wrocław, 1956, pp. 166-7, and A. Cheikh Moussa, "Ġāhīz et les eunuques ou la confusion du même et de l'autre", *Arabic*, 29 (1982), pp. 184-214.
- (29) イスラーム側の史料におけるサカーリブへの言及はミトヲの著作にみられる(ミトヲ)。Mishin, *Sakaliba*.
- (30) Ibn Ṭahārī in: E. Fagnan, *Histoire de l'Afrique et de l'Espagne, intitulée Al-Bayano'l-Mogrib*, 2 vols., Alger, 1901-4, vol. 2, p. 430.
- (31) ミナミヤナギの産品についてのIngmar Jansson, "Wikingertidlicher orientalscher Import in Skandinavien", *Bericht der Römisch-Germanischen Kommission*, 69 (1988), pp. 562-647.
- (32) ヲハムハムズツツツツ Jonathan Shepard, Jacek Gruszczyński and Marek Jankowiak, *Viking-Age Trade: Silver, Slaves and Gotland*, London, Routledge, forthcoming。
- (33) W.C. Green, *The Story of Egil Skallagrinnson: An Icelandic Family History of the Ninth and Tenth Centuries*, London, Stock, 1893, ch 46 [「ヒギンのサガ」谷口幸男訳『アイスランズ・サガ』新潮社一九七九年、六四一-六六頁]。
- (34) ディールハムが社会ステータスの指標として用いられたことについてはミトヲを参照。Lunde & Stone, *Ibn Fāḍlan*, p. 46 [「ハムラーン」二五八頁]。
- (35) ミトヲを参照。C. Peel, *Gula saga : The History of the Gotlanders*, London, Routledge, 1999.
- (36) Felix Biermann & Marek Jankowiak (eds), *The Invisible Commodity: The Archaeology of Slavery in Early Medieval Northern Europe*, forthcoming.

(37) 例えば以下を参照。Elise Naumann, Maya Krzewińska, Anders Götherström and Gunilla Eriksson, “Slaves as burial gifts in Viking Age Norway? Evidence from stable isotope and ancient DNA analyses”, *Journal of Archaeological Science*, 41 (2014), pp. 533-40.

(38) より下を参照。P.J. Lane & K. MacDonald (eds), *Slavery in Africa: Archaeology and Memory*, Oxford, Oxford UP, 2011; and T.F. Taylor, “Ambushed by a grotesque: archaeology, slavery and the third paradigm”, in: M.P. Pearson & I.J.N. Thorpe (eds.) *Warfare, Violence and Slavery in Prehistory*, Oxford, Oxford UP, 2005, pp. 225-33.

(39) 例えば以下を参照。James C. Scott, *The Art of Not Being Governed : An Anarchist History of Upland Southeast Asia*, New Haven and London, Yale UP, 2009〔ヘーマス・C・スロート(佐藤仁監訳)『へた脱国家の世界史』みすず書房、二〇一三年〕。

(40) 例えば Mas'udi, *Muruj al-dhahab*, French tr. Ch. Pellat, *Les prairies d'or*, 5 vols, Paris (1962-97), vol. 1, p. 165; Constantine Porphyrogenitus, *De administrando imperio*, ed. Gy. Moravcsik, tr. R.J.H. Jenkins, Washington, D.C., Damburton Oaks Institute, 1967, pp. 57 and 169°.

(オックスフォード大学講師)